

Title	学問する心と幼児の心
Author(s)	岡, 潔
Citation	幼児の教育
Issue Date	1969-08-01
URL	http://hdl.handle.net/10083/40426
Rights	
Resource Type	Article
Resource Version	
Additional Information	

This document is downloaded at: 2017-11-19T06:59:11Z



Ochanomizu University

学問する心と幼児の心



岡 潔

1

去年の大学生の行動を見て、人は誰でもこれではいけないと思つただろう。

学問をさせようと思うなら、このような教育ではいけないのである。

大学生はおとなしくしている頃から学問が好きではなかった。時間をもて余して、漫画なんかを見ているものが多かった。ここを深く掘り下げてみよう。

2

秋風が吹くとももの悲しい。芭蕉は「秋風はもの言はぬ子も涙にて」といつていゝ。なぜ秋風が吹くとももの悲しいのだから。

うか。

これは、心がもの悲しいというメロデーを奏でるからである。しかしどの心だろう。

心理学の対象である大脳前頭葉の心を第一の心ということにすると、今問題になっている心は秋風に遭いさえすれば、たとえばピアノの同じ鍵キを叩いたように、必ず同じ一つのメロデー「もの悲しき」を奏でる。だから無私の心である。しかるに第一の心は私を入れなければ動かない心である。私は嬉しい、私は悲しい、私は意欲すると動くのである。だ

からこの心ではない。

のみならず第一の心は五尺のからだに閉じ込められてある心である。その証拠に、自分は悲しくても自分の隣にいる人は悲しくない。しかし今問題になっている心は、秋風の吹く所、家々村々悲しくない人はいない。

自然はこの心の中に在ると見るのが実感が出る。実際、秋風がやんで時雨が降り始めると、それまで物悲しきというメロデーで包まれていた自然は、もの懐しきというメロデーに変わる。私たちは物質的自然の中に住んでいるのではない。心のメロデーの中の自然に住んでいるのである。第二の心は確かにある。

3

第一の心は大脳前頭葉に宿っている。第二の心も大脳のどこかに宿っているのだと思う。どこに宿っているのだから。大脳生理学は大脳を五つの部分に分かっている。一番上が頭頂葉、少し前に下

って運動領、さらに前に下がって前頭葉、これはちょうど前額の裏の所である。

頭頂葉を後ろに下がると後頭葉、それから横に廻って側頭葉、これは左右二つあるが、連絡がついているから一つのようなものである。そこを前に廻ると再び前頭葉である。

第二の心はこのどこに宿っているのであらう。

前頭葉は第一の心の宿る所である。ここではない。

運動領は全身の運動を司る所である。ここでもない。

側頭葉は知覚、記憶、判断を司る。言語中枢もある。大脳中の機械室のような所である。ここでもない。

そうすると残りは後頭葉と頭頂葉とである。後頭葉は大脳生理学は「資料室」だといっている。どういう意味かという、たとえば小林秀雄さんという批評家がいる。文化勲章をおもらになつたか

ら皆さんはよく知っておられると思う。小林さんは近頃、出土品の曲玉に凝っている。小林さんがじつとより抜きの出土品の曲玉に見入るのは、この後頭葉においてである。とすれば、それによって特有の感銘を奏する無私の心はここには宿っていない。

そうすると残る所は頭頂葉だけである。大脳生理学は頭頂葉は受け入れ態勢の由つて来たる所といっている。第二の心がここに宿っていたとしてみよう。どういうことになるか。人が何かに遭う。そうするとこの第二の心がそれに応じたメロディーを奏する。そうすると前頭葉の第一の心がつづぎにこれをレシーブし、出所進態を決める。前頭葉がこれに基づいて命令し、側頭葉または運動領がこれに応じる。それでよいわけである。第二の心は頭頂葉に宿っているのである。

4 自然科学は、人はなぜ知覚運動できる

かに対して一言も答えられない。仏教に問うと仏教はこう答える。

人の心の奥底を第九識という。第九識は一面唯一つであつて、他面一人一人個別々である。この一人一人個々別々であるという方向から見たとき、第九識を個という。以下個についていう。

第九識に依存して第八識がある。ここには一切の時がある。しかし他に何物もない。第八識に依存して第七識がある。ここには大小遠近彼此の別がある。彼此の別とは自他の別である。この第七識の現われが自然であり、自分の肉体である。人が普通経験する知力は理性のような型のものである。意識的にしか働かないし、わかり方は少しずつ順々にしかわかつて行かない。しかし、時として、たとえば仏道の修行等の時にはこれと違った型の知力のあることを経験する。即ち無意識裡に働いて、一時にバツとわかつてしまう。かような智力を無差別智とい

う。智力とは知、情、意に働く力である。無差別智には四種類ある。大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

さて人が知覚、運動できるのは無差別智が個に働くからである。

そうすると人が実際にその中に住んでいるような自然は、単に五感でわかるような部分だけではなく、五感ではわからないが無差別智が絶えず働いているようなものでなければならぬ。

ところで無差別智は個に働くのである。いい換えると無差別智が働くということは個の世界の現象である。ところで個の世界は、二つの個は一面二つ、一面一つというのだから、数学の使えない世界である。これに反し自然科学者の考えている自然は数学の使える世界である。だから人が現実に住んでいる自然は、西洋人が太古以来そう考えて来た、物質的自然ではないのである。西洋人の、この太古以来の間違いが、今日のいろいろの誤つ

た思想の源泉になっている。教育も誤っているもの一つである。

5

無差別智は第九識に働く。仏教は第九識は頭頂葉に宿るといつている。四種の無差別智は頭頂葉に源を發し、大脳の各部に流れ入って、その一つずつを受け持っているようである。ただし運動領には智光は働いていない。

頭頂葉は大円鏡智、後頭葉は妙觀察智、前頭葉は平等性智、側頭葉は成所作智。仏教はこう教えている。人が觀念でできるのは大円鏡智の働きである。学問の骨格は觀念態系である。人が認識できるのは妙觀察智の働きである。認識するのは心をその一点に集めることである。人が理性できるのは、平等性智の働きである。人が感覺できるのは成所作智の働きである。無差別智については、「無辺光」

(山崎辨榮著、講談社近刊参照。)

6

さて無私の心であるが、秋風から大小遠近彼此の別を取り去れば後に「もの悲しき」だけが残る。より抜きの出土品の曲玉から大小遠近彼此の別を取り去ればあとに特有の感銘だけが残る。だから無私の心は第八識である。

これは頭頂葉に宿っている。従って第七識は前頭葉に宿っている。(仏教は普通第八識は時と大小遠近の別、第七識は彼此の別といっている。上の分類法は私にわけて変えたのである。それで普通の仏教のいい方でいえば無私の心は第八識の下層である。)

この第八識という心が真の自分であつて、心理学の対象である心は単に第八識の奏でるメロディーのレシーバーに過ぎないのである。

第八識は他が喜んでいれば嬉しいし、人が悲しんでいれば悲しい。人が無心に働けば無上の(他に何もいらぬといふ)幸福を感じるのは、第八識が真の自分だ

からである。

7

大東亜戦争が勃発したと聞いたとき、私はしまった、日本は亡んだと思った。そしてしばらく茫然としていたのだが、やがて起こる一億同胞死なば諸共の声に励まされて、それもよかろうと思った。そして数学研究の中に閉じこもった。これが第八識である。

そうすると外はどんなに騒いでいても、中は、土井晩翠の言葉を借りていえば、
閑雲野鶴空闊く

風に嘯く身は一つ
月を湖上に碎きては

行方波間の舟一葉

この第八識という仙界のあることを歐米人は知らないのであるが、「建国新書」胡蘭成著、中日新聞東京本社発行、日本語、参照）黄老の道の人は頭頂葉には泥洹宮（なげんくわう）があるといっている。泥洹とは有無を離れた境という意味である。これ

で学問する心は頭頂葉の第八識であることが明らかになった。

8

この第八識という心が人の子にいきかに生い立って行くかを見よう。

人は第八識であり、第八識はその中間時間があるのであるから不死である。

だから人の子は「受け入れ態勢」を持って生まれて来る。生まれると生後三か年の間に、家庭という環境から取って、後頭葉の資料室に資料を入れる。これは妙觀察智の働きである。なお妙觀察智を働かせ続けて、資料室の心を頭頂葉に送る。頭頂葉は大円鏡智を働かせて、前世から持ち越して来た第八識の画を新しい絵の具によって新たに描く。これを自己の中核を作るといのである。新しい絵の具が影響する。この季節にはまだ自我というものは出ていない。だから私はこれを童心の季節と呼んでいる。

9

この童心の季節に引き続く三か年強を私は自我発現の季節とよんでいる。この季節に頭頂葉の働きが前頭葉に及ぶのである。

第一年目には自我の外廓ができて、時間空間というものがわかるようになる。

第二年には感情意欲の主体である自分（第七識）がわかる。本当の自分は第八識であってこれが学問する心であるから、この頃から余りひどく自己中心的にならないように自分を抑止させなければならぬ。

第三年目には第八識が子どもの前方の空間に働くようになる。子どもたちはこの頃から自然に興味を持ち、友だちに友情を感じるができるようになる。

幼稚園も家庭もこれを邪魔するような人工的な側頭葉教育をしないようにしなければいけない。詳しいことは「曙」（講談社近刊）を見て欲しい。

（奈良女子大学・数学専攻）